

旅路の果てにあるものは

山尾悠子

小説家

あ、石堂藍が畢生の大作に取り組んでおり、それは古今の幻想・ファンタジー界を総括する大部の『事典』であるそうだ！最初にそう伝えたのは、もう十数年も以前のことになるだろう。おそろき読書量と記憶力を誇る読者・石堂藍にとつての渾身の一書、完成の暁には斯界における決定版となるだろう、とも。当然のことながら執筆期間は長きにおよび、当初の担当者、磯崎純一なども定年をむかえ、社外編集者となった。そうしてついに「末世の偉容が出来ることとなった第2案であるが、何より、ひとりの生身の娘が、この浩瀚な『事典』を編んでのけたという驚異のおのゝく、そして思うことは、ずいぶん遠くまで、よくぞここまで来たものだなということ。石堂さんとはば異世代（私が五歳年上、同業者のひとりとして感慨は深い。

全体像を把握したい、俯瞰したいという欲求に駆られるのは、ごく自然なことにはいかない。わたしにも覚えがある。しかし、対象とするものが膨張であれば、それが叶わぬ夢に終わるのも必定だろう。そう信じて疑わなかったのだけれど、『幻想大事典』はわたしが誤っていたことを証し立てている。太古から現代にわたって人間の想像力が紡ぎあげてきた様々な『幻想』の系譜を分類整理し、東西の文学作品を通して記述する――果敢と通達と無謀と呼ぶべきでないこの企てが、見事に達成されているからだ。

らりと並ぶ。項目数が一万四千に上る索引が完備しているから、興味のある作家や作品を手がかりに分け入っていくのも容易である。特筆すべきは、これらのモチーフを腑分けするにあたっての驚嘆に値する徹底ぶりだろう。たとえば数学・物理学を扱う章では、数、幾何学、次元、電気、磁気という具合にまず七つに分けられた項目は、それぞれさらに細分化されていく。幾何学の場合でいえば、直線、球、立方体を始めとして計二四の小項目が立てられるのだ。目眩に近いものを覚えるのはわたしだけだろうか。

目眩に近いものを覚えるのはわたしだけだろうか。神を扱う第一章に目を通すだけでそれは実感できよう。人間がおこなってきた二千年以上に及ぶ神についての思索が通観され、取り上げられる作品はインドやギリシアの古典から現代日本の漫画やTVアニメに及び、果ては古代宇宙飛行士説まで組込まれているという構成は、著者の『幻想』、『幻想文学』に対する考えを如実に示す。

石堂藍さんが一九八〇年代初頭から二〇〇〇年代初頭にかけて雑誌『幻想文学』の発行人として斯界に多大な貢献を果たした人物であるのは夙に知られることだが、『幻想大事典』は彼女のまさに畢生の大著にして驚天動地の書だと断言して憚らない。江湖で広く用いられんことを願う。



本書の特色

①《幻想》の系譜という類書のない独自の切り口

古今東西の文学作品をはじめ、神話、伝説、美術、映画、漫画、アニメにおける、『幻想』と『想像力』の来歴と諸相を、40章のテーマごとに分類し、系譜的に記述。幻想的な発想の出自とその歴史的展開を探索、今までにない独自の切り口。類書のない大事典。

②事典と読み物の複合体

それぞれの項目が独立しているので、事典のように拾い読みもでき、また章や節単位での通読も楽しめる大百科。全編が著者の一貫した筆跡執筆。

③詳細な総合索引付き

第3巻には、人名・書名・用語・主題等約1万4千を選出した、100ページにわたる網羅的な総合索引を付す。

④図版を多数収載

各巻には900に近い貴重な関連図版も収録。カラー口絵も収載。

本書をお薦めします

- 大学総合図書館、美術大学、文学部、教育学部、創作メディア系学部の図書館。
- 文学や哲学の愛好家。
- 小説、映画、美術、漫画、その他の創作に関わる人。
- 中学高校の図書館、県立図書館、市町村立図書館。
- 美術館博物館の図書館。

著者略歴

石堂藍 いしどうらん

1960年生れ。早稲田大学第一文学部文芸専修卒。書評家、文芸評論家。1982年から20年にわたって『季刊幻想文学』を発行。著書及び共編著に『ファンタジー・ブックガイド』『幻想文学1500ブックガイド』『世界文学あらすじ大事典』『日本幻想作家事典』ほか。

古今東西における《想像力》の歴史

ishidou ran

石堂藍 ◆ 著

幻想大事典 全3巻

国書刊行会

人類が永年生み出してきた

《幻想》のモチーフの歴史的展開を、

詳細に跡づける画期的な大事典。

天使と悪魔の歴史、幻獣の歴史、

鉱物の歴史、分身・変身の歴史、夢の歴史、

時間の歴史、庭の歴史、物語の歴史等々――

40の魅惑的なテーマに見る、《想像力》の来歴と諸相。

推薦の言葉

わが庭を耕す幻想家への
総合力カタログ

『幻想大事典』のすゝめ

荒俣宏

作家・博物学研究者

さあ、どうやってこの大著を読者の手に取ってもらうのか。まあ、本書を「言」えば、とてつもない膨大な農地のごときものだろう。幻想と題されているが、見も知らぬ物の怪が無闇と跋扈する原始林に誘いこらうという本ではない。むしろ、無秩序に形成した思想とイメージの荒地を、なるべく自然法風に耕し直し、知の収穫をバランスさせ、共存に持って行くという、地道な「耕作」をめざす本である。

時間もかかり、回り道も多いのだが、幻想が異常増殖した現在の世界を地道に耕すという、文字どおり「晴耕雨読」を望まれる人には、長らく迫ってもらえる本である。

著者によれば、本書は「幻想の大きなカタログ」だという。本好きにとつてカタログとは、十九世紀末頃アメリカのシアーズ・ローバックあたりが開始した通信販売用絵入商品目録を略する。しかもこれらの商品目録は田舎で世の変化と無関係に「歩みず地を耕していた農民に、農業を便利で楽にする利器を伝える役を果たした。著者が本書の起源を「庭」にあると明かすことと通じ合う。十八世紀に共和制や啓蒙思想といった新しい幻想を振るまいたヴォルテールも、想像できる限りの不運と危機を並び立てた幻想小説『カンディッド』の結末で、あらゆる恐怖を生き延びた主人公に「それでも、わたしはこれらの畑を耕さなければなりません」と言わせている。然したるの刈り地となるはずだ。

したがって、本書には非常に多彩な索引と分類が用意される。いわば「畑を耕す鉢」であり、長い時間を費して内容の発掘・掘り出すことを可能にする。読者がどこまで幻想を掘ろうとも、おどろく読者の庭の底の底から、あたらしい幻想の芽が吹くだろうことを、諸君に合いたい。じつはばくも、さき本書で「オテサーネ」というチエコの『食欲旺盛』な植物の民話に出食し、さきくシユヴァンクマイエルの映画と、クトナー・ホラの骸骨寺を訪問したときの動画を引く張りだして、今しがた楽しい解釈のやり直しをしたばかりだった。

驚天動地の書

横山茂雄

国文学者・奈良女子大名誉教授

らりと並ぶ。項目数が一万四千に上る索引が完備しているから、興味のある作家や作品を手がかりに分け入っていくのも容易である。特筆すべきは、これらのモチーフを腑分けするにあたっての驚嘆に値する徹底ぶりだろう。たとえば数学・物理学を扱う章では、数、幾何学、次元、電気、磁気という具合にまず七つに分けられた項目は、それぞれさらに細分化されていく。幾何学の場合でいえば、直線、球、立方体を始めとして計二四の小項目が立てられるのだ。目眩に近いものを覚えるのはわたしだけだろうか。

目眩に近いものを覚えるのはわたしだけだろうか。神を扱う第一章に目を通すだけでそれは実感できよう。人間がおこなってきた二千年以上に及ぶ神についての思索が通観され、取り上げられる作品はインドやギリシアの古典から現代日本の漫画やTVアニメに及び、果ては古代宇宙飛行士説まで組込まれているという構成は、著者の『幻想』、『幻想文学』に対する考えを如実に示す。

石堂藍さんが一九八〇年代初頭から二〇〇〇年代初頭にかけて雑誌『幻想文学』の発行人として斯界に多大な貢献を果たした人物であるのは夙に知られることだが、『幻想大事典』は彼女のまさに畢生の大著にして驚天動地の書だと断言して憚らない。江湖で広く用いられんことを願う。



2026年10月 全3巻同時発売
B5判・上製函入り
カラー口絵入り
各巻定価：本体 20,000 円＋税
装丁●山田英春
刷絵●川島徳香

第1巻◎726p
ISBN978-4-336-07890-2
第2巻◎552p
ISBN 978-4-336-07891-9
第3巻◎668p
ISBN 978-4-336-07892-6

国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
Tel.03-5971-7421 Fax.03-5970-7427
https://www.kokusho.co.jp e-mail:info@kokusho.co.jp

帖合・書店印

申込書

国書刊行会『幻想大事典』を購入します

お名前

ご住所

お電話

※必要事項をご記入の上、書店へお渡しく下さい。

第1巻
第2巻
第3巻

冊
冊
冊

イシドーラ女神の
世界再創造

小説家

諏訪哲史

連載もない偉業。こんな浩瀚な幻想世界研究の怪物的書物が21世紀の今、AIなしに在野の女性著者の手で書き上げられた。信じ難い、が僕には信じられる。あの稀代の読書魔、記憶魔である石堂藍なら可能だろう。現実世界・幻想世界、いずれが広大か。断然後者である。確かに幻想は現実と源するが、無二と映る現実も、各人の内心に畏怖され神話化され怪物化され無限増殖する。人の想像力と詩性により世界は百鬼夜行と化する。余りの膨大さに眩暈を禁じ得ぬ本書はまさに事典と呼ぶに相応しい巨著だが、これは実は個別検索の用途より、一から順を追って通読を目指すべき読み物であると思われる。

幻想世界の極めて微細な範疇区分にも著者独特の感性が光って読み易く、数頁おきに美麗な図版があらわれているのも嬉しい。僕の幻想文学的血脈において、父的存在は長く滋澤龍彦・種村季弘だったが、いつしか姉が二人いると気づいた。長姉が山尾悠子、そして次姉が石堂藍である。そもそもこの次姉が長姉を「永の眠りから目覚めさせたのである……つまり石堂藍が東雅夫編集長・発行し続けた伝説のカルト誌『幻想文学』の記事から、僕は知世界世界の端々たる広さも連綿たる長さも、またそれが特集したことで眠りを覚ます山尾悠子も知ったのである。

高校時代、滋澤の『東西不思議物語』を読んで聴せた絶大な流瀆感、あれを極限まで緻密な装・微分増幅させた化物が本書である。マチュリオン『放浪者メルモス』のイシドーラ姫から筆を止めた石堂藍は「姫」と敬称を呼ぶ。から昔、メルで本書の『呪術的言語』未知の言語の項の草稿データが届き、異常に綿密な章立てで言葉の失った、この的的な執念、数理的な網羅性。石堂藍こそ現代のプリニウス、パベルの反世界を統べる知の女神である。僕は敬愛する姐を労いつつ、この無類の迷宮に踏み込むと、たテセウスとなろう。幻想世界も、永遠なれ。

人類の夢と願いが

詰め込まれた

《幻想》のすべてが

ここに！

執筆10余年、

原稿7000枚、

図版900!!

組見本（原寸の75%）

B 飛ぶための道具

B-1 タラリア

ヘルメウスは有翼のサンダルを履いた旅人の姿で描かれるのを常とする。このサンダルは黄金でできていて、風のように速く飛ぶことができる。このサンダルがラテン語でタラリアと呼ばれるようになった。オウディウスなどに使用例がある。

ペルセウスも有翼のサンダルで空を飛んでいるが、これはニムベールから得たという説もあれば、老女神グライアアイから奪ったという説もある。ペルセウスのサンダルもタラリアと呼ばれるので、タラリアは固有名詞ではないだろう。

B-2 風火輪

風火輪は別名を脚踏風火と言います。風火を巻き起こしながら飛ぶ一對の車輪。『封神演義』明代に出てくるもので、哪吒はこれに乗り、空中を移動する。



エドワード・バーネー・ジョーンズ『武装するペルセウスと海のニンフたち』(1877)

B-3 空を飛ぶ車

旧約聖書の『列王記』(前六世紀)第二章には、エリヤ昇天の様が語られている。すなわち、エリヤはむじ風に乗って天にのぼった。エリヤは竜巻と共に神の国へ召されるのである。

このとき、エリヤの後継者であるエリシヤは、火の馬と火の車によってエリヤに送られる。ここから、エリヤの馬車という誤説がなされる。すなわち、エリヤは火の馬が牽く戦車に乗って天に行くというものだ。聖書の図像化がなされた頃にはすでにこの誤解が成立していたと思われる。現在でもたいていの聖書語では、火の戦車だ。火の戦車というイメージには、アポローンが牽ぐ「太陽の戦車」が影を落しているように思われる。アリオストン『狂えるオルランド』(二五一六)では、このエリヤの馬車に乗って、オルランドが月に行く。

B-4 ユイマナ

ヒンドウの神々も天空を翔るが、その時に「太陽の戦車」のような乗り物を使うところもあるという考えから発想したのが、空飛ぶ戦車あるいは高飛のユイマナである。ヴァールミキ

B-5 飛ぶための道具

B-6 飛ぶための道具

B-7 飛ぶための道具

B-8 飛ぶための道具

B-9 飛ぶための道具

B-10 飛ぶための道具

B-11 飛ぶための道具

B-12 飛ぶための道具

B-13 飛ぶための道具

B-14 飛ぶための道具

B-15 飛ぶための道具

B-16 飛ぶための道具

B-17 飛ぶための道具

B-18 飛ぶための道具

B-19 飛ぶための道具

B-20 飛ぶための道具

B-21 飛ぶための道具

B-22 飛ぶための道具

B-23 飛ぶための道具

B-24 飛ぶための道具

B-25 飛ぶための道具

B-26 飛ぶための道具

B-27 飛ぶための道具

B-28 飛ぶための道具

B-29 飛ぶための道具

B-30 飛ぶための道具

B-31 飛ぶための道具

B-32 飛ぶための道具

B-33 飛ぶための道具

B-34 飛ぶための道具

B-35 飛ぶための道具

B-36 飛ぶための道具

B-37 飛ぶための道具

B-38 飛ぶための道具

B-39 飛ぶための道具

B-40 飛ぶための道具

B-41 飛ぶための道具

B-42 飛ぶための道具

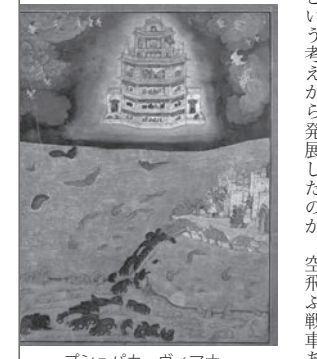
B-43 飛ぶための道具

B-44 飛ぶための道具

B-45 飛ぶための道具

B-46 飛ぶための道具

B-47 飛ぶための道具



プシユバカ・ユイマナ

5 B 飛ぶための道具

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

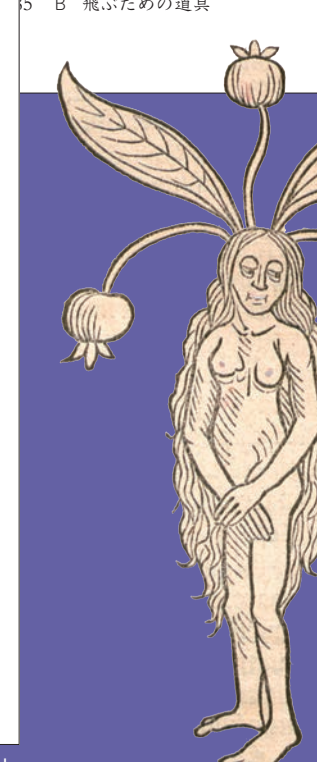
本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本



ホドラー『夢』(1897)

第26章 夢 50

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本

本文見本